

# 芥川龍之介作品についての一考察

——仙人の〈試し〉による〈人間回帰〉

上 岡 祥 子

## 序

芥川龍之介の作品の中に三つのよく似た話がある。その三作品とは、「仙人」、「魔術」、「杜子春」であるが、どれも主人公が仙人（或いは魔術師）に出会って試験のようなものを課され、それへの対応によってその後の人生が変わるといった話である。しかも、発表された順に従って、内容も少しずつ発展した形となっている。同じモチーフを用いながら、その主題に発展が見られる背景には、芥川自身の精神的変移があるのではないだろうか。そして最終的に芥川が求めた解答とは〈人間回帰〉ということではなかったろうか。ここでいう〈人間〉とは、平凡ではあっても人間の情を持っているということであり、芥川自身の作家活動においては、技巧を凝らして特異な状況にある人間の心理を描くのではなく、現実以降り立って現実に生きる人間の情緒を描くことである。理知と虚構による作品に次第に行き詰まりを感じるようになった芥川は、大正九年頃から抒情を描く作風に転向して、作家

としての新しい道を模索しようとする。この模索の中で芥川が得た答とは何であったのか。「仙人」、「魔術」、「杜子春」と順を追って考察して、ここでその道筋の一つを辿ってみたいと思う。

## 一 「仙人」

「仙人」は、大正四年七月に執筆され、大正五年八月に第四次「新思潮」に発表された作品である。北支那の見世物師である李小二は、人生に寂寞と苦しみを感じているのだが、ある小さな廟で乞食の老道士に出会い、同情すると、老人は実は仙人であると正体を明かして、紙銭を無数の金銭や銀銭に変えてみせ、李は陶朱の富を得るといふ話である。

この作品の典拠として大島真木氏は、アナトール・フランス作「聖母の軽業師」と〈模倣といつてもいいほどにその設定・描写・構成までが〉類似していると指摘しており（注一）、また、藤田祐賢氏は、「聊齋志異」の「鼠戲」と「雨銭」をあげて作品の舞台・設定の類似を述べている（注二）。即ち、「仙人」はその

設定・構成・描写においては、芥川の獨創性が薄い作品であると  
言つてよいだろう。その上で芥川は「仙人」において何を描こう  
としたのであろうか。

この作品の中の李小二の人物は次のように描かれている。

明日の暮しを考へる屈托と、さう云ふ屈托を抑圧しようとす  
る、あてどのない不愉快な感情とに心を奪はれて、いちぢらし  
い鼠の姿も眼にはいらぬ事が多い。(上)

何故生きてゆくのは苦しいか、何故、苦しくとも、生きて行  
かなければならないか。勿論、李は一度もさう云ふ問題を考  
えて見た事がない。が、その苦しみを、不当だとは、思つて  
ゐる。さうして、その苦しみを与へるものを——それが何だ  
か、李にはわからないが——無意識ながら憎んでゐる。事に  
よると、李が何にでも持つてゐる、漠然とした反抗的な心も  
ちは、この無意識の憎しみが、原因になつてゐるのかも知れ  
ない。(上)

しかしさうは云ふものの、李も、すべての東洋人のやうに、  
運命の前には、比較的屈従を意としてゐない。(上)

このように前半部では、李小二の人生への「屈托」と生の苦し  
みへの「無意識の憎しみ」を抱きつつ、また運命に「屈従」して  
いく様子を軸に描いている。これについて竹内真氏は、李小二の  
「漠然たる人生への反抗は亦龍之介のそれに通じてゐる」ことを  
指摘している(注三)が、この「龍之介のそれ」、すなわち芥川  
自身の「漠然たる人生への反抗」を考へる上で、見落としてはな  
らないのが、この作品を書き上げる直前の芥川の失恋事件であ  
らう。

芥川の初恋の女性として知られる吉田弥生と芥川の恋愛は、芥  
川の親族の反対にあつて、結婚という芥川の願望が実現することなく  
大正四年初頭に終わりを迎える。この事件の後、芥川が親友の井  
川恭(後の恒藤恭)に送つた書簡にその頃の芥川の苦惱が窺われ  
る。

イゴイズムをはなれた愛があるかどうか イゴイズムのある  
愛には人と人との障壁をわたる事は出来ない 人の上に落ち  
てくる生存苦の寂寞を癒す事は出来ない イゴイズムのない  
愛がないとすれば人の一生程苦しいものはない

(傍線引用者)(注四)

この書簡からはまさに芥川が人生に苦しみ、運命を憎みながら  
も、それを受け入れるしかないという諦観が読み取れる。この人

生の苦しみへの憎悪と、同時にそれに従わざるを得ないという諦観の姿勢は、李小二の姿勢と重なるようにも見え、事件後最初の作であるこの小説の主人公に、自身の姿を投影させたのかもしれない。

そんな生活を送る李小二がある淋傍の小さな庵で雨宿りをしてゐる時に会ったのが、乞食の老道士であつた。その老人は「垢じみた道服を着て、鳥が巢をくひさうな頭をした、見苦しい老人で」あつて、李は老人に対して、「幾分の同情を動かさし」、会話を交わす。

李は、この老道士に比べれば、あらゆる点で、自分の方が生活上の優者だと考へた。さう云ふ自覚が、愉快でない事は、勿論ない。が、李は、それと同時に、優者であると云ふ事が、何となくこの老人に濟まないやうな心もちがした。彼が、談柄を、生活難に落して、自分の苦しさを、わざわざ誇張して、話したのは、完く、この濟まないやうな心もちに、煩はされた結果である。(中)

李は自分より「下」の人間を見て、優越感を感じる利己心と同時に、同情心をも持つごく一般的で善良な男であつた。ところがそんな李の見込みに反して、老人は、李の同情による世間の弱状の話の途中で、「あなたは私に同情して下さるらしいが」と言っ

て、「堪へきれなくなつたやうに、声をあげて笑ひ、私は、金には不自由をしない人間で」あると言ふ。「氣違ひ」かと疑う李に、老道士は自分は仙人であるとその経歴を話し、紙銭を無数の金銭や銀銭に変えて見せる。李は「この雨銭の中に、何時までも、床に這つたまゝ、ぼんやり老道士の顔を見上げてゐた」。ここで仙人の正体が明かされ、李は意外な出来事に呆然とする。つまり、李の優越感や同情心は全く見当違いで、無意味なものであつたことがここで判明したのである。

「下」においてその後の李の姿が語られる。

李小二は、陶朱の富を得た。偶、その仙人に遇つたと云ふ事を疑ふ者があれば、彼は、その時、老人に書いて貰つた、四句の語を出して示すのである。(略)但、これは、李小二が、何故、仙にして、乞丐歩くかと云ふ事を訊ねた、答なのださうである。

「人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚、無聊なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに。」(下) (傍線引用者)

この作品はまさに、この終末の一句に収斂すべきであるはずだが、しかしそれは単に仙人の言葉以上の意味を持ち得ず、ただ漫

然と富を享受した李の人生に反映された形跡はない。ただ文末に「怒らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ、苦しい事を、探して歩いてみたのであらう。」という作者の言葉が付されているだけであり、この句に対する李自身の感想も何ら記されておらず、「上」における李の苦悩への解答も示されてはいない。

李は救済されたのであらうか。もし李が「陶朱の富」によつて救済されたのであれば、清水康次氏が指摘されているように、  
「救済するものが富である以上、窮状も貧困の域を出るものであつてはならない」(注五)のであり、李の人生苦という精神上の問題は置き去りにされていることになる。また、李が救済されていないのならば、仙人との邂逅は何の問題解決にもなっていないことになる。どちらにしても中途半端な終わり方であり、問題があるといえよう。

従つて、李という人物の造形は不十分なものになり、人生苦の問題への解答も曖昧なまま終わっている。芥川自身の生活上の苦悩を李に投影しながらも、芥川自身がその問題に明確な答を得られないまま作品を仕上げたため、このように渾然とした展開を示し得ないままの結末となつたのであらう。

## 二 「魔術」

「魔術」は大正八年十一月に執筆され、大正九年一月に「赤い

鳥」に發表され、大正九年一月末、春陽堂発行の「影燈籠」などに収録された作品である。「私」が、インドの魔術の大家であるマテイラム・ミスラというインド人に魔術の伝授を乞うて、「欲を捨てる」ことを条件にかなえられるが、一か月後、友人とのトランプの賭けに魔術を使おうと考へた瞬間、欲心のある者に資格はないと告げられ、一か月前の世界に連れ戻されてしまうという話であり、「私」の語りによつて話は進んでいく。

前半部でミスラの不思議な魔術が「私」の前で披露され、ミスラの「あなたでも使はうと思へば使へますよ。」との言葉に「私」はそれは本当なのかと訊ねる。

「使へますとも。誰にでも造作なく使へます。唯——」と言ひかけてミスラ君は、ちつと私の顔を眺めながら、いつになく真面目な口調になつて、

「唯、慾のある人間には使へません。ハツサン・カンの魔術を習はうと思つたら、まづ慾を捨てることです。あなたにはそれが出来ませんか。」

「出来るつもりです。」

私はいかう答へましたが、何となく不安な気もしたので、すぐに又後から言葉を添へました。

「魔術さへ教へて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑はしさうな眼つきを見せましたが、

さすがにこの上念を押すのは不躰だとも思ったのでせう。

という経緯で〈私〉は魔術を教へてもらふことになるのだが、〈私〉の〈何となく不安な気〉は、〈私〉の自分の〈慾心〉への不安を表すと共に〈私〉の俗性を提示しており、〈ミスラ君〉の〈疑はしさうな眼つき〉は読者の疑いを代弁するものであろう。

魔術を教わる場面は描かれずに、〈私がミスラ君に魔術を教はつてから、一月ばかりたつた後のこと〉に話は飛ぶ。友人との集まりで乞われて、石炭を金貨に変えるという魔術を披露してみせた〈私〉は、友人たちの賞嘆を受けるが、ここで注目すべきなのは、友人たちの賞賛は、△何しろ大した魔術を習つたものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。△という言葉に代表されるように、魔術自体の力に対してよりも、△無数の金貨を出して見せたことに向かつているということである。△無数の金銭や銀錢にただ〈ほんやり〉するだけであつた「仙人」の李に対して、より積極的にその欲望と人間味が露にされている。そして〈慾心〉を捨てるべき魔術によって出された金貨が、周囲の〈慾心〉を満足させたことによつて賞賛されるとは、矛盾しているようでもあるが、最も人の賞賛を引き出す魔術が金貨を出すことであるという現実と、その現実によすやすと従っている〈私〉の中に、既に〈慾心〉を捨てるべき魔術の破綻が見え隠れしているといえよう。

〈私〉は初めは〈悠然と〉して、△いや、僕の魔術といふやつは、一旦慾心を起こしたら、二度と使ふことが出来ないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまつた上は、すぐに又元の暖炉の中に抛りこんでしまはうと思つてゐる。△と言つてあくまでミスラとの約束を守ろうとするのであるが、友人たちに反封されて、結局骨牌で決めることになる。面白いように勝ち続ける〈私〉に友人は最後に自分の財産全てと〈私〉の今までの勝ち分全てを賭けた勝負を申し出る。

私はこの刹那に慾が出ました。テエブルの上に積んである、山のやうな金貨ばかりか、折角私が勝つた金さへ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまはなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさへすれば、私は向うの金財産を一度に手へ入れることが出来るのです。こんな時に使はなければどこに魔術などを教はつた、苦心の甲斐があるのでせう。さう思ふと私は矢も楯もたまらなくなつて、そつと魔術を使ひながら、(略)

△この刹那に慾が出た〈私〉は、勝つカードを魔術で引き当てた次の瞬間、一か月前の世界に引き戻されてしまい、へにやりと気味の悪い微笑を浮かべているミスラと向かい合っている。

けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習ふ資格のない人間だといふことは、私自身にもミスラ君にも、明かになつてしまつたのです。私は恥しきうに頭を下げた假、暫くは口もきけませんでした。

「私の魔術を使はうと思つたら、まず慾を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業が出来てゐないので。」

ミスラ君は気の毒さうな眼つきをしながら、(略) 静にかう私をたしなめました。

〈仙人〉としての役割を負うミスラは、試した結果、〈慾心〉を捨てることの出来なかつた(私)をたしなめ、〈気の毒さうな眼つき〉をする。「仙人」の老道士が、何の試しも金銭欲への諫めもなく李に富を与えてしまつたのに対して、〈超越考〉としての上からの視点は同様に持ちつつも、さらに厳しく積極的な形で〈私〉の人生に関わつてきているといえよう。但し、〈慾心〉を捨てきれない人間の哀れさと諦観を描きながらも、〈私〉の〈慾心〉についての解決策は示されておらず、救済は行なわれていない。「仙人」において受け入れられた物欲が否定されたことは大きな前進であるが、その物欲の否定の先はまだ見えていない。

### 三 「杜子春」

「杜子春」は、大正九年七月に「赤い鳥」に発表され、大正十

年三月十四日、新潮社発行の「夜來の花」に収録された作品である。金持の息子杜子春が財産を使い果してほんやりしてゐるところに、仙人鉄冠子が現れ、多額の黄金を与えられて、贅沢な暮らしをするが、金の有無によつて態度を変える人間の薄情さに気づいて、鉄冠子について仙人の修業を始める。杜子春は何があつても口をきかないという約束を守つて、地獄の様々な責め苦にも耐えるが、最後に馬に変えられた両親が鞭打たれて、ついに「お母さん」と叫んでしまう。仙人になれなかつた杜子春は「人間らしい、正直な暮らし」をしようと決意する。中国唐代の傳奇小説、鄭還古撰の「杜子春伝」を典拠とし、六部構成をとつてゐる。

一、二で、仙人の助言によつて金持ちになり、贅沢をしてはまた貧乏になるということを二度繰り返すが、杜子春の生活ぶりと同様の人の態度の違いが描かれるだけであつて、杜子春の心情の吐露は三においてなされる。

「いや、お金はどういらぬのです。」

「金はもう入らない？　はあ、では贅沢をするにはどうとう飽きてしまつたと見えるな。」

老人は審しきうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢にあきたのぢやありません。人間といふものに愛想がつかたのです。」

杜子春は不平さうな顔をしながら、突慳貪にかう言ひました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辭も追従もしますけれど、一旦貧乏になつて御覽なさい。柔しい顔さへもして見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな気がするのです。」

「仙人」の季が気づかず、「魔術」の〈私〉が克服できなかつた金銭欲（物欲）の問題を、杜子春は前半部で軽く乗り越えており、〈仙人〉の第一の〈試し〉にまずは合格したことになる。

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑ひ出した。

「さうか。いや、お前は若い者に似合はず、関心に物のわかる男だ。（略）」

この老人の〈審しさうな眼つき〉や〈にやにや笑ひ〉は、「魔術」のミスラの〈気の毒さうな眼つき〉や〈にやりと気味の悪い微笑〉と同等のものであって、凡人を上から見下ろし試す〈超越

者〉の属性であるといえよう。

そして、物欲を乗り越えた杜子春は次に仙人である老人の弟子になることを願ひ出て、快諾を得、大喜びする。そこで杜子春が峨尾山で一言も口を利かずに老人を待つことになると、様々な魔物に威され地獄の責め苦に遭うが、杜子春は耐えぬく。

しかし死んで畜生になつた父母を鞭打たれ、母の〈心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは黙つて御出で。〉という声に、ついに声を出してしまう。

母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怒む気色さへも見せないのです。

大金持になれば御世辭を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何といふ有難い志でせう。何といふ健気な決心でせう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶやうにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一声を叫びました。

こうして仙人になりそなつた杜子春は、〈微笑みを含みながら〉話しかける老人に対して、仙人になれなかつたことを〈反

つて嬉しい気がする」と言い、また鉄冠子はもしあの時黙っていたら（即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐた）ことを告げて、杜子春が仙人になりそこなうことで第二の（試し）に合格したことを示唆する。金持ちに愛想が尽き、仙人にももうなりたいと思わない杜子春にこれからどうするのか尋ねると、杜子春は、今何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです。」と、今までにない暗れ暗れした調子で答える。

この杜子春の答こそが、「仙人」の李の人生苦を暗らし、「魔術」の（私）が到達すべきであつた、人生への解答であらう。人生への解答を得た杜子春の姿に、山敷和男氏は（おそらく杜子春は「自ら神にならうとすること」をあきらめた人間である。臆病な、平凡な、侏儒として一生をすこししたいと祈る「侏儒の祈り」の人間である。それは大正の小市民の祈りを代表している人間である。杜子春をそういう人間に描き上げることによって、「杜子春伝」の近代化が完成した（注六）と述べており、また海老井英次氏は（芸術至上という超越的な生を支える「刹那の感動」という理念が崩れていくのを目前に、人間に回帰せんとする芥川の決意を表す叫びでもあつたのだ。）（注七）と述べている。この（人間回帰）には、芥川が作品の転向を試みた「秋」の直後の作品であることも大きく関わつてきているであらう。

「秋」は、大正九年四月に「中央公論」に発表された作品で、

女主人公信子の心理を描いた中編である。歴史に取材して技巧を凝らした従来の作風から現実的なものに目を向けるという作風の転換を示す作品と見られており、芥川自身も発表後に「秋」は大して悪くなきそうだ 案ずるよりうむが易かつたと云ふ気がする 僕はだん／＼あ、云ふ傾向の小説を書くやうになりそうだ」（注八）と自信を持っている。文壇でも好評であつたが、三好行雄氏の（巧緻な近代心理主義の原型ではありえても、写実主義の成功作では決してない）（注九）という指摘によつて、芥川のリアリズムへの復帰という視点は完全に否定されている。

「杜子春」は、芥川が人間を現実の視点に下りて描くことを試み、成功とこれからの指針を感じた転換期の作品「秋」の三ヵ月後の作品であるのだから、当然「秋」と同様に現実に降り立つて人間を描くことを意識した筈であらう。

事実、原典の「杜子春伝」では杜子春は母親の言葉には声を上げず、さらに女に生まれ変わつて産んだ子の危機に初めて声を上げるが、芥川の「杜子春」では母親の言葉の時点で既に簡単に声を上げてしまつており、原典に一ひねりも二ひねりも加えて作品に仕上げることを常とする芥川にしては、童話であるからという大きな理由もあるが、安易な作り方であるようにも見え、即ちそれだけ（人間回帰）を目標した作品であるといえよう。

恩田逸夫氏が（単なる逃避ではなく人間性の真実への積極的な希求（注一〇））を見ると述べたように、（人間らしい、正直な暮

し。こそが杜子春の辿り着いた答なのである。

## 結

物欲の虚無を自覚して、物欲を否定し、へ人間らしい、正直な暮しを希求することこそ、〈仙人〉がその〈試し〉によって示唆しようとしたことであり、三つの作品によってそれが次第に達成されて、最後に杜子春が解答を得るといふ過程こそ、芥川が自身の人生の中で同様に答を模索していく姿の投影であったのではないだろうか。芥川が杜子春に与えた答とはへ人間らしい、正直な暮しであり、それはそのまま芥川の得た答でもあったのだらう。

しかし「杜子春」発表当時の、正宗白鳥の、へ有り振れた人情に雷同した作為された物であり、へかういふ程度の人間らしさに、作者は人間を見たつもりで、また自己を見たつもりで安んじてみたのであるか（注一）といった批評もあるように、類型的で安易な印象を免れず、「杜子春」の得た安易な人情による解答をそのまま芥川への解答とするにはやはり不十分であったと言わざるをえない。

芥川は技巧と理知の行き詰まりへの打開策を、現実的な平凡な人間の姿を書いていくことに求め、その試みは、「秋」や「杜子春」におけるように成功したかに見えた。しかし、その安易な人

情でしか表すことの出来ないへ人間回帰は、作品も芥川自身の内実をも支ええるほどのものではなかった。現実の視点に降りきること、現実的であるがゆえに安易で平凡な人間像に安んじること、結局、芥川にはできなかったのである。

芥川が回帰すべき地点はもつと別の所にあつたのではないか。吉本隆明氏は「芥川の死」（注二）で、へ本封返りをしえなかつた芸術家である芥川がへ回帰すべきだつた地点をへ自己の安定した社会意識圏へいいかえれば処女作「老人」、「ひよっこ」の世界、即ちへ中流下層の庶民作家たる自己の資質であつたとして、へ彼の回帰をおしとどめたのは出身階級にたいする自己嫌悪、神経的な虚栄にみちた自虐であつたと信ずると喝破している。

回帰すべき自己の本領に、自己のへ人間に帰ることができることができなかった芥川は、結果、安易な人情によるへ人間に降り立つしかなかった。しかし再度行き詰まつた芥川は昭和二年七月二十四日、服毒自殺を遂げることになる。芥川が久米正雄に宛てた遺書には次の言葉が遺されていた。

僕の手記は意識してゐる限り、みづから神としないものである。いや、みづから大凡下の一人としてゐるものである。君はあの菩提樹の下に「エトナのエムベドクレス」を論じ合つた二十年前を覚えてゐるであらう。僕はあの時代にはみづか

ら神にしたい一人だった。(傍線引用者) (注一三)

芥川は《大凡下》を意識しながらも、最後まで《神》の視点を志向せずにはいらなかったことが窺われる。

《人間回帰》とは、人生と作家活動に苦悩を抱える芥川が見いだした一つの光明であったが、しかしそれは芥川の商品の中心になり得るものではなく、その後、後期の苦悶の時代に入っていくことになる。

### 注

- (注一) 「芥川龍之介の創作とアナトール・フランス」(『大正文学の比較文学的研究』(昭和四三・三)所収。日本文学研究資料叢書「芥川龍之介」(有精堂、昭和四五・一〇)再録)。  
(注二) 「聊斎志異」の一側面——特に日本文学との関連において——(『慶応義塾創立百年記念論文集』昭和三三・一一)  
(注三) 「芥川龍之介の研究」(大同館書店、昭和九・一二)  
(注四) 大正四年三月九日芥川恭宛書簡  
(注五) 「羅生門」への過程——岩森亀一氏所蔵の資料を用いて——(『国語国文』第五十一巻第九号、昭和五十七年九月二十五日)  
(注六) 「杜子春」論考(『早稲田大学「漢文学研究」九、昭和三六・九  
(注七) 「芥川文学作品論事典(杜子春)」(『芥川龍之介必携』學燈社、一九八一・三三)

(注八) 大正九年四月九日滝井孝作宛書簡

(注九) 「芥川龍之介のある終焉——仮櫻の生の崩壊——」(『国文学』昭和四五・一一)

(注一〇) 「芥川龍之介の年少文学」(『明治大正文学研究』十四号、昭和一九・七)

(注一一) 「文壇人物評論」(中央公論社、昭和七・七)

(注一二) 「芥川の花」(『解釈と鑑賞』昭和三三・八)

(注一三) 「或伯友へ送る手記」(『芥川龍之介全集』)

尚、本文は全て、「芥川龍之介全集」(岩波書店、一九九五)による。

(うえおか さちこ) 岡山大学文学研究科修士課程二年)

### 研究室受贈図書雑誌目録(三)

- 大妻女子大学大学院文学研究科論集(大妻女子大学大学院文学研究科) 七  
岡山大学国語研究(岡山大学教育学部国語研究会) 一一  
沖繩芸術の科学 沖繩県立芸術大学付属研究所紀要(沖繩県立芸術大学付属研究会) 八  
香川大学国文研究(香川大学教育学部国語国文学研究会) 二二  
学芸国語国文学(東京学芸大学国語国文学会) 二九  
学習院大学国語国文学会誌(学習院大学国語国文学会) 四〇  
学術研究 国語国文学編(早稲田大学教育学部) 四五